

初診患者からみた慶應義塾大学病院 漢方クリニックの特徴

西村 甲 前嶋 啓孝 荒浪 暁彦
渡邊 賀子 福澤 素子 石井 弘一
秋葉 哲生 渡辺 賢治

慶應義塾大学医学部漢方医学講座, 東京, 〒160-8582 新宿区信濃町35

Characteristics of Keio University Hospital's Kampo Clinic Judging from the First Visit Patients

Ko NISHIMURA Hiroataka MAESHIMA Akihiko ARANAMI
Kako WATANABE Motoko HUKUZAWA Koichi ISHII
Tetsuo AKIBA Kenji WATANABE

Department of Kampo Medicine School of Medicine, Keio University, 35 Shinano-machi, Shinjuku-ku, Tokyo 160-8582, Japan

Abstract

Background : Since 2002, Keio University Hospital's Kampo Clinic has promoted itself actively through the media, public presentations, faculty outreach and an internet home page. However, the relative value of these promotions is unknown. Additionally, the range and prevalence of presenting concerns, and the ages and the gender ratio of the patients served at Keio is unknown.

Objective and Methods : To better understand and better serve the patients, the medical charts of every new patient who presented to Keio University Hospital's Kampo Clinic from November 2004 to November 2005 (n=791) were retrospectively analyzed for 1) referral source, 2) age, 3) gender, and, 4) disease category.

Results : The internet webpage was by far the best source of new patient referrals. The out-of-hospital referral rate to the clinic was remarkably low. Women exceeded men by a 3 : 1 ratio. Most women were in their thirties but male patients were fairly evenly distributed across the age spectrum. Patients under 16 and over 70 were gender-balanced. The vast majority of patients presented with general medicine/pediatric, dermatological or gynecological problems.

Conclusion : A patient-oriented internet home page provides a good source of new patient referrals. Given the low rate of referrals from outside hospitals and physicians, additional outreach directed at internal medicine, dermatology or obstetrics/gynecology physicians appears warranted.

Key words : Kampo clinic, Keio University hospital, new patients, referral source, disease category, age and gender composition

要旨

背景 : 2002年以降、メディア、出版、インターネットなどを通して様々な活動を行ってきたが、その効果あるいは外来患者の特徴について検討することがなかった。

目的と方法 : 当漢方クリニック受診患者の特徴とこれまでの広報活動の効果を調査し、将来のクリニックのあり方について検討した。平成16年11月から1年間に当クリニックを初診した患者791例(男229, 女562)を対象に受診に至る紹介・情報源、年齢性構成、疾患領域について調査した。

結果 : 紹介・情報源に関しては、インターネットによるものが最も多く、他施設からの紹介が極めて低かった。女性は男性の3倍前後を占めた。患者数は女性では30歳代が最も多く、男性では全年齢で同様であった。16歳未満と70歳以上の患者数に男女差がみられなかった。疾患領域では、内科、産婦人科、皮膚科疾患が66.9%を占めた。

結論 : インターネット・ホームページによる漢方診療に関する情報提供が、患者数増加に有用であることが示唆された。紹介率が極めて低いことから、内科、皮膚科、産婦人科を中心に病診連携機能を高めていく必要がある。

キーワード : 漢方外来、大学病院、初診患者、紹介・情報源、疾患領域、年齢性構成

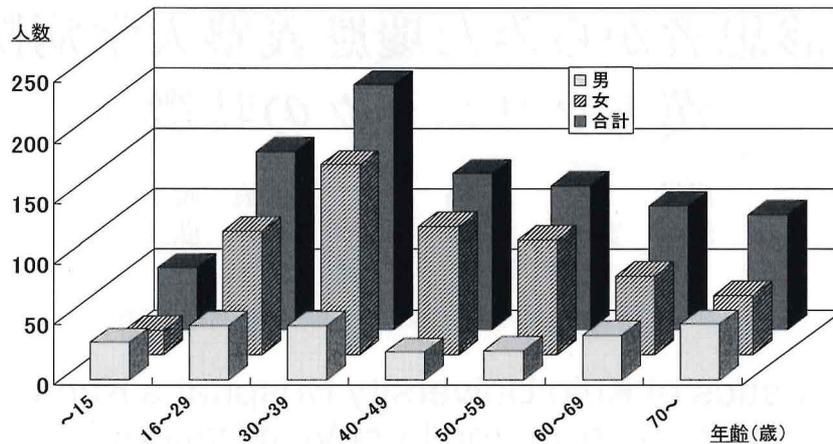


図1 年齢性構成

初診患者数を年齢別ならびに男女別に示した。各年代において前面から男性、女性、男女合計に分類して表記した。

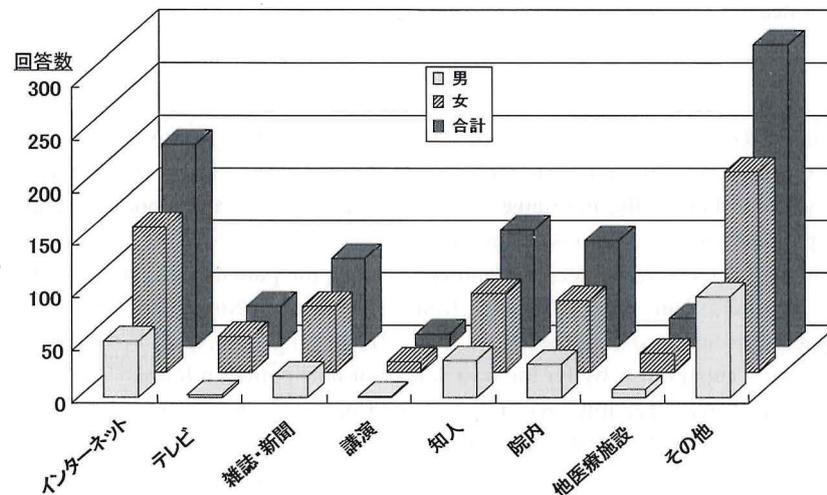


図2 受診に至る紹介・情報源

初診患者の当クリニック受診に至る紹介・情報源について男女別に示した。前面から男性、女性、男女合計の順に表記した。複数回答があったため、回答数は845（男251，女594）であった。

緒言

大学病院においては、診療、研究、教育をバランスよく行えることが理想である。しかし、一診体制の当クリニックには月平均1100名の患者が受診するため、担当医は診療のみに専念せざるを得ない状態である。すなわち、教育面において十分な対応ができていない状況といえる。当漢方クリニックの特徴を把握し、将来のあり方について検討した。

対象と方法

平成16年11月から1年間に当クリニックを初診した患者791例（男229，女562）を対象に問診表から当クリニックを受診するに至った紹介・情報源ならびに患者の疾患について調査した。紹介・情報源に

関してはインターネット、テレビ、新聞雑誌、市民講座あるいは各種講演、知人の紹介、院内関係者の紹介（他科依頼を含む）、他施設からの紹介に分類した。記載が無く情報が得られなかったものは不明とした。疾患を診療科別に分類した。小児科を内科に含めた。個々の患者において、疾患あるいは紹介・情報源が複数ある場合、全てを採択した。

結果

年齢性構成（図1）をみると、30歳代の患者数が最も多かった。女性が男性の3倍弱を占めた。しかし、15歳以下の小児と70歳以上の高齢者では男女差が認められなかった。

紹介・情報源（図2）に関しては、不明33.8%を

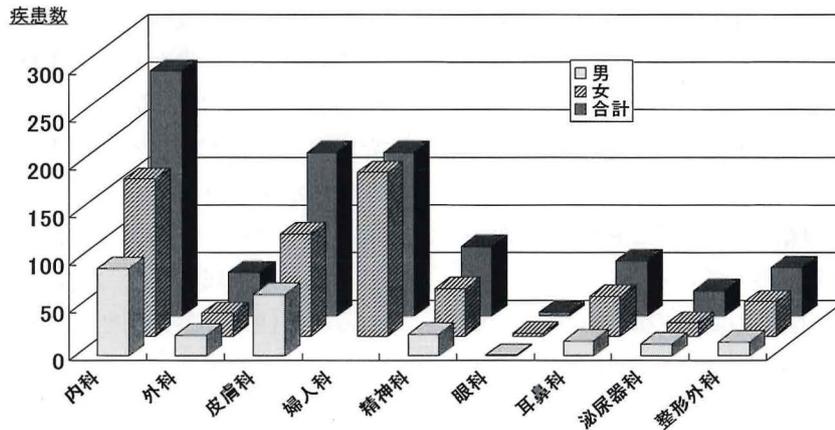


図3 疾患領域

初診患者の疾患について診療科別および男女別に示した。前面から男性、女性、男女合計の順に表記した。疾患が複数の場合があったため、疾患数は860（男247，女613）であった。

除くと、インターネット22.6%が最も多かった。次いで知人紹介13.0%，院内紹介11.8%，新聞雑誌9.8%，テレビ4.5%，他施設紹介3.1%，講演1.3%であった。対象を50歳未満とすると、インターネットが30.4%を占めた。一方、テレビ、講演をきっかけに受診する場合、他と比較して女性の割合が高かった。

疾患領域（図3）では、内科疾患29.9%が最も多かった。皮膚科疾患20.0%と産婦人科疾患20.0%が同数で続き、以下、精神神経科疾患8.5%，外科疾患7.7%，耳鼻咽喉科疾患6.7%，整形外科疾患5.9%，泌尿器科疾患3.1%，眼科疾患0.5%の順であった。対象を16歳以上60歳未満とすると、産婦人科疾患が26.6%を占め、内科疾患に次いだ。対象を40歳未満とすると、皮膚科疾患が32.2%を占め、最も多かった。

考察

今回の調査により、我々のクリニック受診患者の特徴として、女性が多い、インターネットにより情報収集する人が多い、テレビ、市民講座、新聞雑誌により受診した患者には女性が多い、市民講座受講者が少ない、他施設からの紹介率が低い、皮膚科・婦人科疾患が多い等が判明した。

女性患者が多いことから、女性においては自身の健康、疾患あるいはその治療に対する関心の高いことが伺える。健康、疾患に関する特集記事も女性雑誌に多いことから、この傾向は明らかと思われる。漢方外来受診者には男女差が認められないとする報

告¹⁾もあるが、概して女性患者が多いといえる^{2)~5)}。しかし、15歳以下の小児、70歳以上の高齢者においては受診患者の男女差を認めなかった。15歳以下の小児においては受診決定権が親権者にあるため、患者に男女差を認めないことは当然ともいえる。高齢者においては男性においても健康、疾患に対する関心が高まっていることが考えられる。

当クリニック受診患者、特に青壮年層においてはインターネットにより情報を収集する割合が高いことから、情報発信方法としてホームページを充実させることは極めて重要と考えられる。当クリニック受診の際に、ホームページからクリニック担当医の専門性を把握した上で来院する患者も多いことから、ホームページは漢方診療の存在の広報だけでなく、患者サービスの意味からも大切といえる。アクセス件数向上のため、内容の更新と改善に今後とも努めていく所存である。

テレビ視聴、市民講座、新聞雑誌により受診した患者には女性が多かったことから、情報収集における男女差の存在が判明した。生活環境にもよるが、専業主婦など自宅に居る時間が長いほどテレビ等から漢方に関する情報を得やすいと思われる。新聞雑誌、特に女性雑誌においては健康関連の記事も多いため、漢方に関する情報を得る機会も増加すると考えられる。

我々が主催する市民講座は、約800名の参加者を有し、非常に盛況であるが、この講座の受診患者増加効果は低いといえる。この理由として、市民講座

では漢方が未病を治す，すなわち疾病予防に有効であることを大きなテーマにしているため，参加者には基本的に健康な方が多いことが挙げられる。しかし，市民講座自体は啓発活動として有意義と考えられる。

他の医療施設からの紹介が3.1%と極めて低かったことは二つの問題を提起している。

一つは漢方に対する医師の認識の低さである。慶應義塾大学病院全体でみた紹介率が60%であることからすると，当クリニックの紹介率は異常な低さといえる。これは，医師の70%が漢方薬を使用するといわれている状況⁶⁾でありながら，漢方治療を実践する医師が極めて少ない現状を示唆するものである。実際に他院からの紹介状をみると，患者の希望によるものが大半である。漢方医学教育のさらなる充実が期待される。

もう一つの問題点は患者が多すぎることが教育，研究を行う大学病院の機能を圧迫することである。大学病院の外来として特に大切なことは，患者の疾患が多岐にわたり，かつ，ある程度時間的に余裕のある診療を行うことである。西洋医学と全く異なる体系をもつ漢方医学を学生あるいは研修医に理解させるためには，西洋医学の場合に比し時間を要すると考えられる。当講座は，平成19年度から初期研修医，後期研修医を受け入れることになったため，特に教育面での充実が重要と考えている。初診患者を増やす一方で，治療方針が定まり，症状が安定した患者の逆紹介を進めることが大切である。この点で病診連携を高めるべく，当院の関連施設を中心に漢方治療の啓発活動に取り組むことを検討している。

これからの漢方治療においては，受診患者の疾患

として多かった皮膚科および婦人科疾患に重点を置く必要があると思われる。本検討結果は1970～80年代の報告^{1)～4)}とは異なっているが，2005年の北里研究所東洋医学総合研究所の検討⁵⁾においても同様の傾向が示唆されている。こうした変化に対応すべく，我々のクリニックにおいては平成15年から漢方アトピー外来，平成16年から女性抗加齢外来を設置している。今後は，東西両医学の面から専門性を有するスタッフを充実させることも必要と考えている。

文献

- 1) 関 正威，鈴木博夫：当科における漢方製剤による治療経験と漢方医学の小史および将来の展望，埼玉医科大学雑誌，**9**，251-262 (1982)
- 2) 谷口千津留，小林三枝子，安井広迪，斎藤 隆，桑木崇秀，大塚敬節：北里研究所附属東洋医学総合研究所における漢方外来の状況，日東医誌，**4**，201-205 (1975)
- 3) 有地 滋，森山健三，石田定廣，山本智子，溝端智津子：近畿大学東洋医学研究所診療部門における漢方外来の現況，薬局，**34**，77-84 (1983)
- 4) 中村久美子，稲木一元，田中一郎，高梨久恵，山田光胤：漢方診療所を受診する患者像について—渋谷診療所における動向—，日東医誌，**34**，257-262 (1984)
- 5) 金 成俊，中村恵子，緒方千秋，坂田幸治，山田陽城，花輪壽彦：北里研究所東洋医学総合研究所における初診患者の解析と医療への活用，日東医誌，**56**，287-293 (2005)
- 6) 漢方薬使用実態調査，Nikkei Medical 2003年10月号，別冊付録，33-38，日経メディカル開発，東京 (2003)